

県中教研 英語部会だより

第 36 号

発行日 令和3年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 浦田 栄信
題 字 金山 泰仁 先生

“Respect each other. Listen to each other.”

指導主事 青山 拓也

次年度より、新学習指導要領が全面実施となります。「英語を使って何ができるようになるか」という到達目標を明確にし、小学校での学びとの接続を十分意識した授業改善が、これまで以上に求められます。

本年度も、小学校の外国語活動や外国語科の授業を参観する機会がありました。いずれの授業でも子供たちが、英語を口にするのが楽しくて仕方がないといった表情で、臆せず、時にはジェスチャー等も用いて生き生きと言語活動を行っている姿が印象的でした。

ある外国語活動の指導案に、「“Respect each other. Listen to each other.”を日頃の指導で大事にしている」と記してありました。“respect”は、たとえ意見が違っていても、たとえ自分の好みに合わなくても、その価値を認め素晴らしいものだとして尊重する、一目置く、認めることです。NHKラジオ英会話講師の大西泰斗先生の言葉を借りると、「英語でのコミュニケーションの真ん中には“respect”があり、日本語のコミュニケーションの真ん中には『礼』がある」ということです。互いを尊重し、思いや考えを否定せずに聞き合う、そのような姿を教室で大事にしていくことは学級経営の土台であり、人権感覚を養う基礎であり、ひいては国際理解教育を支えていくことにつながります。先述の授業には、こういった「隠れたカリキュラム」が根幹にあるのでしょうか。

人やもの、環境等、関わる全てを大事にする心を耕し合いながら、温かい学級風土をつくっていく。そして授業では、子供たちが「英語って面白い！英語が好きかも…」と思うようなきっかけをつくっていく。この変化の年度こそ英語科から、これまでの実践を踏まえて失敗を恐れずチャレンジし、英語の授業を思い切り楽しむ気持ちを発信していきたいものです。我々教員が、思う存分授業を楽しむ姿に、子供たちは心揺さぶられ、学習課題に魅力を見いだし、主体的・対話的に学びを深めていくことなのでしょう。“Respect each other.”をいつも心のどこかにおきながら、これからの社会の創り手となる子供たちのために、英語教育の一層の研究や実践に尽力していきましょう。

(東部教育事務所)

新学習指導要領実施を控えて

部長 浦田 栄信

couldという単語をcoldと同様に発音する生徒が多いと感じていたある時。こういう時こそ、英語の歌の出番と考え、エリック・クラプトンの名曲「Change the World」を生徒に紹介することにしました。いわゆるサビの部分である「Baby if I could change the world」が、生徒の頭の中をグルグルと回って離れないようなら大成功、という小さな目論見でしたが、その際に以下のような話を添えました。「西田敏行さんの『もしもピアノが弾けたなら』って曲、知っていますか？」(知らない生徒が大勢いたのにはやや驚きました。)[面白いね、もしもピアノが『弾ける』なら、ではなくて『弾けた』なら。過去の形で表現しています。][クラプトンの曲もcouldを使っています。つまり、もしも世界を変えることが『できる』ならではなくて、『できた』なら、ということですね。こういうところに、英語と日本語のちょっとした共通点がありますね。]多くの生徒は「そうか、なるほど」という表情をしていました。

さて、いよいよ来る4月から、平成29年告示の中学校学習指導要領が全面実施となります。ご存じのように、文法事項として現在完了進行形や前述のような仮定法のうち基本的なもの等が新たに加わります。私たち英語教員は「教えることが増えた」と考えるのではなく、「生徒が、英語で表現できることが増えた」と考えるべきでしょう。従来の学習指導要領にある文法事項では表せなかつたいくつかの事柄について、話す、書くなどが可能になるわけです。

これまでも各校においては、コミュニケーション能力の育成を目指す指導を行い、一定の成果を上げてきました。さらに次年度からは、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を設定」を合言葉に、生徒が自分の体験や考えを伝え合う授業づくりに努めていきたいものです。

(富・西部中)

第64回研究大会報告

■新川地区

新川地区大会では、魚津市立東部中学校を会場に、長田真夏教諭とALTコーリス・ジェフリー先生による1学年の研究授業が行われた。

「提示されたテーマを見て、自分の意見を理由も含めて相手に伝えよう」を目当てとし、相手を変えつつ、いくつかのテーマで即興的な会話練習にペアで取り組んだ。JTEとALTによるウォーミングアップから本時の活動への流れがスムーズであり、生徒たちは和やかな雰囲気の中で活動に取り組んでいた。ペア活動では、JTEとALTのモデル対話から、生徒たちが気付いた会話を続ける工夫や理由を付け加える表現を上手く活用しながら、自分たちの発話量を増やしていた。何度も対話練習を繰り返すことで、生徒たちは自信をもち、生き生きと自分の思いを英語で語っていた。身近なテーマからスタートし、最終的には“In the future, which do you want to live in, Toyama or Tokyo?”や“In the future, do you want to go abroad?”等、思わず考えなくなるテーマを提示し、生徒たちは英語を通じて互いの多様な考えに触れることができる授業となった。

部会協議では、授業のよかった点や改善点等について付箋を用いて、少人数グループで話し合った。グループでの話し合い後、各グループでの協議内容を全体で共有した。例年よりも部会協議の時間が長く設定されていたため、充実した話し合いとなった。

青山拓也指導主事(東部教育事務所)からは、「必要感があり、生徒がワクワクする課題を設定すること」、「話す活動では、生徒自身が培ってきた力を総動員して即興的に話すことが重要であること」、次年度から完全実施される学習指導要領や新しい評価等についての貴重な助言をいただき、今後の指導改善に向けて学びの深い協議会となった。

南雲 鉄雄 (中・上市中)

■富山地区

富山地区大会では、富山市立南部中学校を会場に、川端有紗教諭、高尾尚多教諭による1年生2クラス、剣田正美教諭、佐竹良夫教諭による2年生2クラス、澤山啓子教諭による3年生1クラスの授業が行われた。

1年生では、各自が事前にインタビューした情報を基に英作文したものを持ち寄り、グループで先生の紹介文を作成する活動に取り組んだ。2年生では、to-不定詞の副詞的用法を導入しながら、「コロナ禍が終息したら行きたい場所とその目的を伝え合おう」という課題で、ペアでスモールトークをした。3年生では、過去分詞による後置修飾を用いて自分の好きな歌をペアで紹介し合った。

どの学年においても、マッピングやカード、有名な絵画や人物等を用いたり、教師がモデルを示したりすることで生徒の興味を引き出し、学習意欲の向上を図った。また、授業の始めにゲームや英問英答で前時までの学習を復習し、本時の学習課題につなげていくスモールステップが意識されており、生徒はグループやペアでの活動に主体的に取り組んでいた。さらに、口頭発表したことを毎回ノートに書くことで、学習内容の定着及び書く力を高める工夫がみられた。いずれの授業でも、日頃の継続した取組が、学習の定着に重要なことを再認識することができた。

部会協議では、成果がみられた点と改善すべき点を2色の付箋に記入し、指導案の展開部分に貼りながら話し合いを進めることで、活発な意見交換が行われた。指導主事の先生方からは、相手を意識でき、必要感のある目的や場面、状況を設定した言語活動をさせることや、小・高との接続を意識して的確に指導する必要があること等、貴重な助言をいただき、今後の指導改善に向けて、大変有意義な研修会となった。

志賀 靖子 (富・堀川中)

【研究主題】 コミュニケーション能力を養うにはどのように指導したらよいか。

－ 聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの言語活動を通して －

■高岡地区

氷見市立南部中学校を会場に、事前に録画、編集した幸塚憲子教諭による3学年の研究授業を公開する形で大会を実施した。前時の授業の様子から本時の取組、そして単元の最終ゴールの生徒の姿を見ることができた。

本時では「ALTに日本文化を伝える」という、言語の使用目的、場面、状況設定が明らかな課題のもと活動が行われ、生徒は意欲的に取り組んでいた。最初から例文を多く提示することなく、まずは生徒が英文を作成し、それらについて内容を深めるためのポイントをグループ内で確認し、よりよい発表になるように話し合う姿がみられた。

部会協議では、「生徒の思考力・判断力・表現力を高める『書くこと』の指導の工夫」について協議した。例文やヒントを提示するタイミング、そして活動形態等について話し合った。前時で作成した作文を発表し、内容を深めるためのポイントを提示してから、英文を再考、再発表する活動を通して「書く活動」の充実が図られたこと等を



確認した。また、越井寿雄主任指導主事（西部教育事務所）からは、「授業改善への意識」「新学習指導要領に伴う学習評価」について貴重な助言をいただいた。新学習指導要領では言語活動を通してコミュニケーション能力を養うための指導をすべきであることを学んだ。言語活動を行う際に目的や場面、状況等を設定することの大切さを今回の授業のねらいと照らし合わせながら教えていただいた。学習評価については、5領域ごとの観点別評価の在り方、指導と評価の一体化の大切さについて学んだ。今後の授業改善をしていく上で、有意義な研修となった。

鈴木 智子（射・小杉中）

■砺波地区

砺波地区大会では、小矢部市立石動中学校を会場として、中谷吉孝教諭による3学年の研究授業が行われた。

外国にいるALTの両親が、日本にいる家族と一緒に体験したいと思う日本の伝統行事紹介ビデオレターを作成するという目的のもと、生徒は前時までに原稿を作成した。本時はその原稿をクラスメイトに読んでもらい、内容についての質問や意見を参考にして、自分の体験や考えを付加した原稿を完成させるという活動が行われた。ペアでの活動により、協力しながら取り組むことで、生徒は互いの表現について検証し、「よりよい表現になった」「内容が深まった」という達成感を味わっていた。ALTの家族に宛てたビデオレター作成という状況設定により英語を使う必然性が生じ、一人一人が意欲をもって主体的に取り組む様子もみられた。

研究協議では、授業のよかった点や改善点等について付箋を用いてグループで話し合った。よかった点として、場面設定が明確であることやペア活動の雰囲気よさ、辞書の効果的な活用等の意見が挙げられた。改善点、疑問点としてワークシートの使い方や評価の方法等が挙げられ、今後の授業改善につながる協議となった。



宮城渉指導主事（西部教育事務所）からは、会話を継続するために、関連する質問を即座にする場面を様々な言語活動の中に設定すること、英語を使って気持ちや考えを伝え合うために学習課題に相手意識や目的意識を備えること、学級内の人間関係づくりの大切さ等について助言をいただいた。また、来年度から評価の観点が3観点となるにあたり、各観点の評価規準についてどのような視点で評価していくかなど、今後の指導改善に向けて大変有意義な研修会となった。

橘 かおり（砺・福野中）

各地区の取組から

下新川郡中教研「本年度の取組から」

下新川郡英語部会では、「コミュニケーション能力を養うにはどのように指導したらよいか～聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの言語活動を通して～」の研究主題に基づき、研究授業の実施や各校での日頃の実践事例の紹介、意見交換を行い、授業改善と指導方法の工夫に努めている。

6月に朝日町立朝日中学校で予定していた研究授業は中止となったが、各校での実践事例を持ち寄り、意見交換を行った。1年生では、“Are you ~?”と“Do you ~?”の疑問文の使い分けを行いながら、お互いの出身小学校や好きなこと+自分で考えた質問を尋ね合う活動が紹介された。ねらいを明確にしたコミュニケーション活動のよい事例紹介となった。2年生では、部屋の写真を提示し、その部屋にあるものを“There is ~.”“There are ~.”を使って表現する活動が紹介された。文型の定着だけでなく、“on the wall”や“by the bed”等の前置詞の使い分けや部屋にある様々なものを英語で表現することから、語彙力の向上につながる効果的な活動であった。その他にも、パワーポイントを活用し、写真やイラストを使って生徒の興味・関心を高める教材や似た発音の単語の聞き取りを行う教材等、各自の豊富な取組を紹介し合った。

また今年度、入善町立入善中学校3年生では、毎時間授業の導入でsmall talkに取り組んでいる。生徒は提示された話題について、ペアで自由に会話を行う。即興で話す活動では多くの失敗を伴うことから、生徒には次のことを伝えてある。①正確さは求めない、②伝わればOK、③途中から話が逸れてもOK、④相手の話に反応しよう、の4点である。“accuracy (正確さ)”より“fluency (流暢さ)”に重点を置き、やりとりがどれだけ継続できるかという視点から生徒の活動を観察している。4月当初は、30秒程度だった会話が、120秒程度の会話ができるようになっている。友達と楽しく会話すること、伝わる喜び、間違えても大丈夫という雰囲気、言語活動の充実を支える根底にあるのではないかと考える。

嘉志摩優作 (下・入善中)

魚津市中教研「研究授業を通して」

魚津市中教研英語部会では、研究主題に基づき、各校での互見授業を中心に、日頃の実践や『Bridge』を用いた授業実践の工夫、中教研学力調査の分析等について情報交換し、研究を進めている。今年度は、特に「実際の場面で思考・判断し、即興で伝え合う力を付けるような言語活動の工夫」を重点目標とし、東部中学校での研究大会、西部中学校での要請訪問研修において研究授業を行い、研修を深めた。

11月に魚津市立西部中学校で行われた、田中研匠教諭とALTによる3年生の授業では、新学習指導要領の「話すこと [やり取り]」の項目についての実践発表を行った。「今までで一番の旅行」について伝え合う活動を通して、英語を用いて即興で会話を2分以上続けることを目標とした。授業ではALTとJTEが「今までで一番の旅行」について会話をし、まず、内容や使用した表現について全体で共有した。その後、相づち表現を確認したり、会話を継続するために使えそうな質問を考えさせたりした。ペアでの会話を1分間行った後、「言いたかったが言えなかったこと」や、「こういう表現が使えた」というものを全体で共有し、2回目以降のペア活動に生かされていた。

協議会では、付箋を用いて、効果的だった点や改善点等について協議した。導入の時、共有した表現や過去形にとらわれることが多く、会話につまる様子もみられたことから、未来形等、今まで習った表現を使っていくようもっと促してもよかつたのではないかといった意見が出された。

有澤健指導主事(東部教育事務所)からは、新学習指導要領における重要なポイントについて助言をいただいた。また、小中接続について、「自然に英語で表現ができる状態で中学校に入学してくる生徒が増えてくる。中学校では英語を使うことの面白さをさらに感じられる授業づくりを構築していく必要がある。」との助言をいただき、今後の授業改善をしていく上で、大変有意義な研修となった。

大久保理世 (魚・西部中)

中新川郡中教研「本年度の取組から」

中新川郡中教研英語部会では、研究主題に基づき、研究授業を実施し、各学校での実践事例や中教研学力調査等の情報交換を行い、研究を進めている。今年度はコロナウイルス感染症拡大防止のため、郡中教研での研究授業は中止、また部員が会しての協議も困難であったため、各校の今年度の実践例を紹介する。

上市町立上市中学校では上市町教育委員会とともに小中連携に力を入れており、11月に上市町外国語活動指導研修会が行われた。この研修会は3年前から取り組んでおり、小学校の教員と中学校の教員、ALTが小学校における外国語の授業の指導の工夫、中学校での授業実践等について協議している。今年度はCHI ACADEMYの高橋知春氏を講師としてお招きし、小学校での課題や悩みを中学校の教員を交えて討議した。また、小学校での外国語の授業の様子を踏まえ、中学校入学当初にどのように指導するべきかについても言及していただき、大変有意義な研修会となった。

立山町立雄山中学校と舟橋村立舟橋中学校では授業におけるICT機器の有効活用について研究実践を重ねている。ICT機器を積極的に授業に取り入れることで生徒の理解の一助とすることを目指している。

雄山中学校では、本文読解の導入でICT機器を使用し、英文を見る前にイラストや動画で場面や概要をつかむ活動を行っている。また本文に関する写真等を提示し、既有知識を増やすことによつて、教科書本文が理解しやすくなることもねらいの一つである。

舟橋中学校では、パワーポイントを使用し、生徒に視覚的に文構造を理解させたり、フラッシュ教材として使用したりしている。また生徒はタブレットを利用し、お互いのパフォーマンスを撮影し、すぐにフィードバックを行ったり、成果を共有したりしている。

これからも各校の研究実践を共有し、更なる言語活動の充実に向けて研究を進めていきたい。

南雲 鉄雄 (中・上市中)